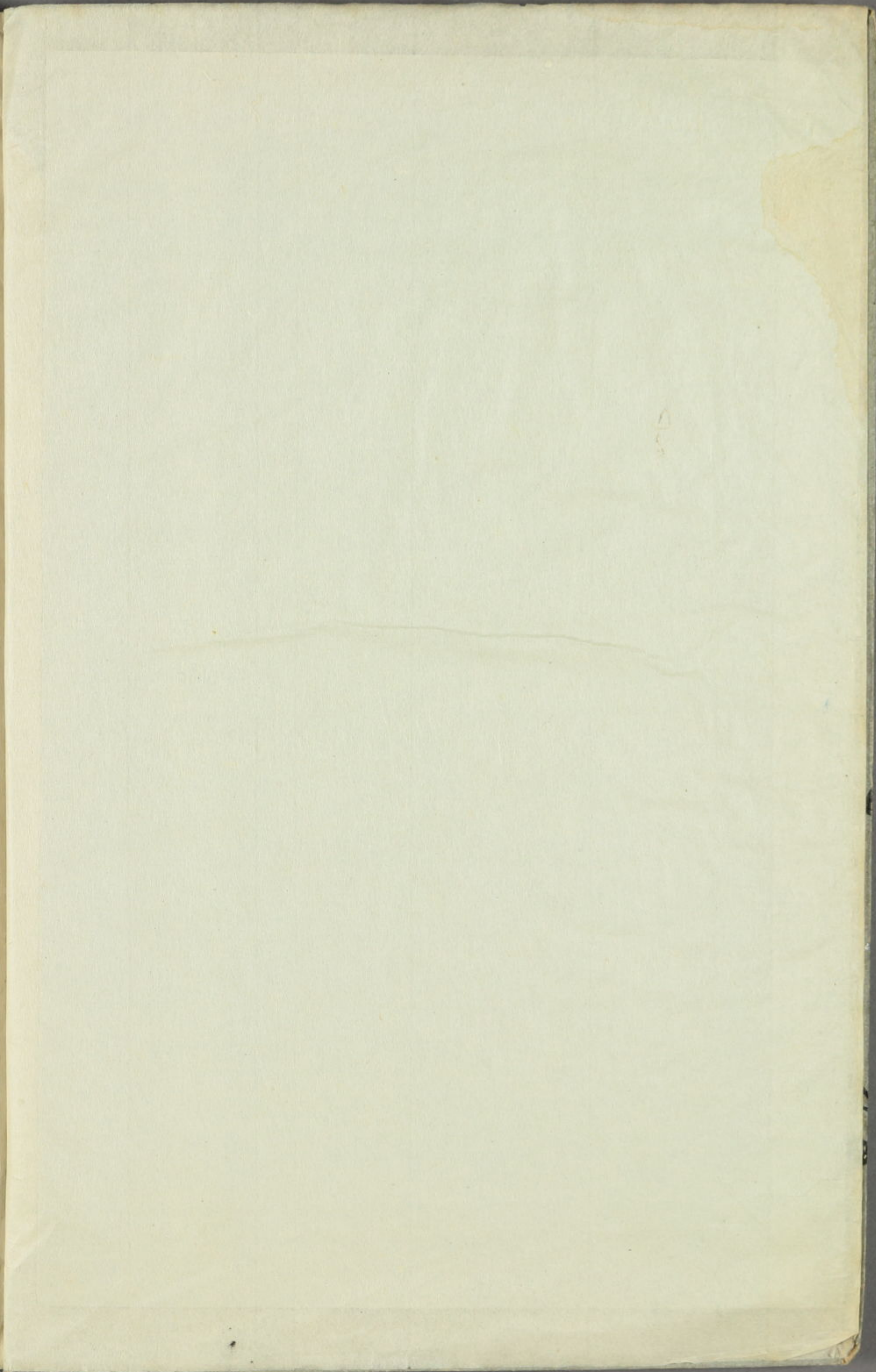


浪化上人
芭蕉翁懷舊





追哭芭蕉翁桃青隱士一廻忌
叨綴独吟誹諧百韻以供

伏冀

靈鑑

思ひ出に空れ機娘を志く身月

指る水の直水る袖

大障子元方明^アる^スる^クて

とま^アる^ク雀の百お^ハな^スと^ハつ^ク

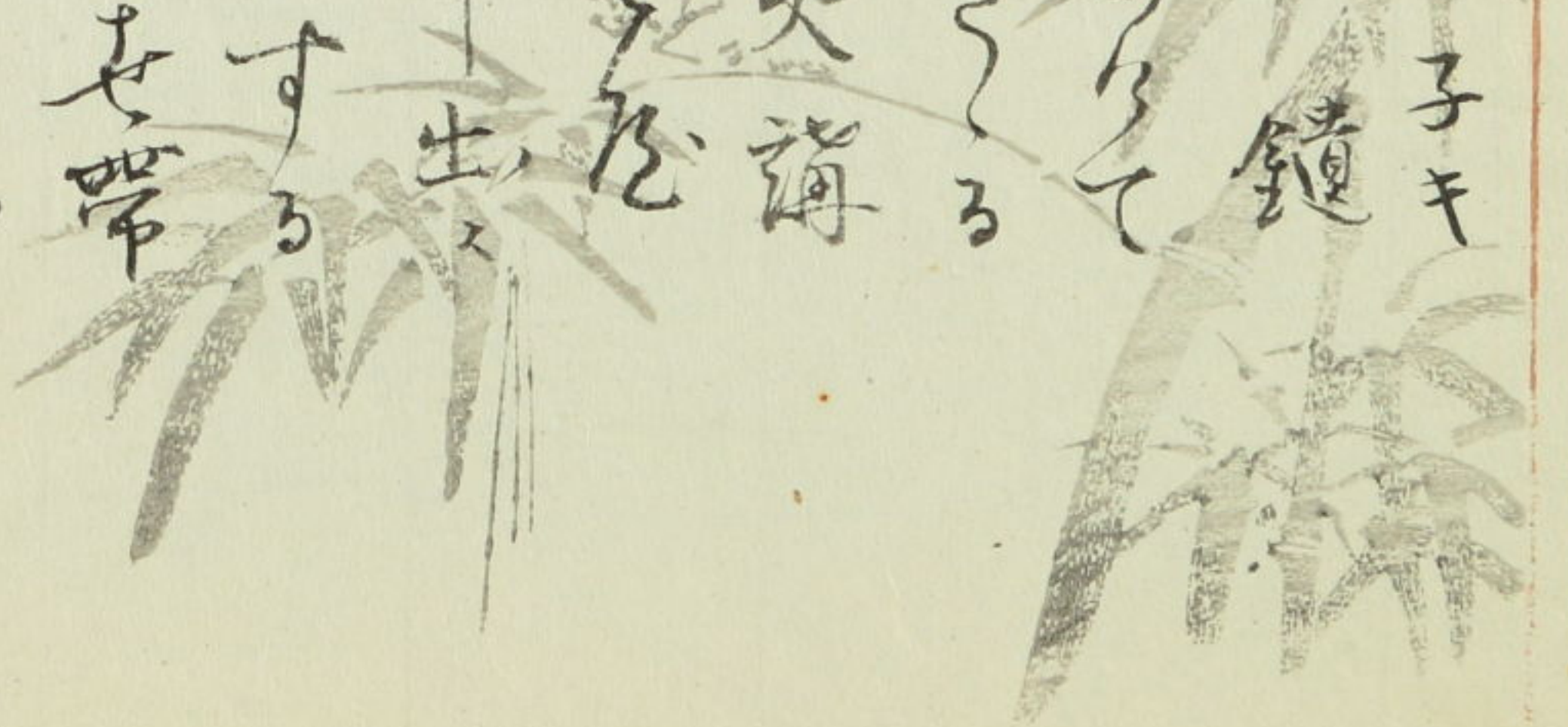
齋^{イナツカ}乃お^ハ形^カ—くら^ハい^ハよ^ハ並^ハて^ハあ^ハを

あ^ハる^ク妻のさ^ハう^ハり^ハれ^ハ白^ハ子^ハ川^ハ心^ハ筋

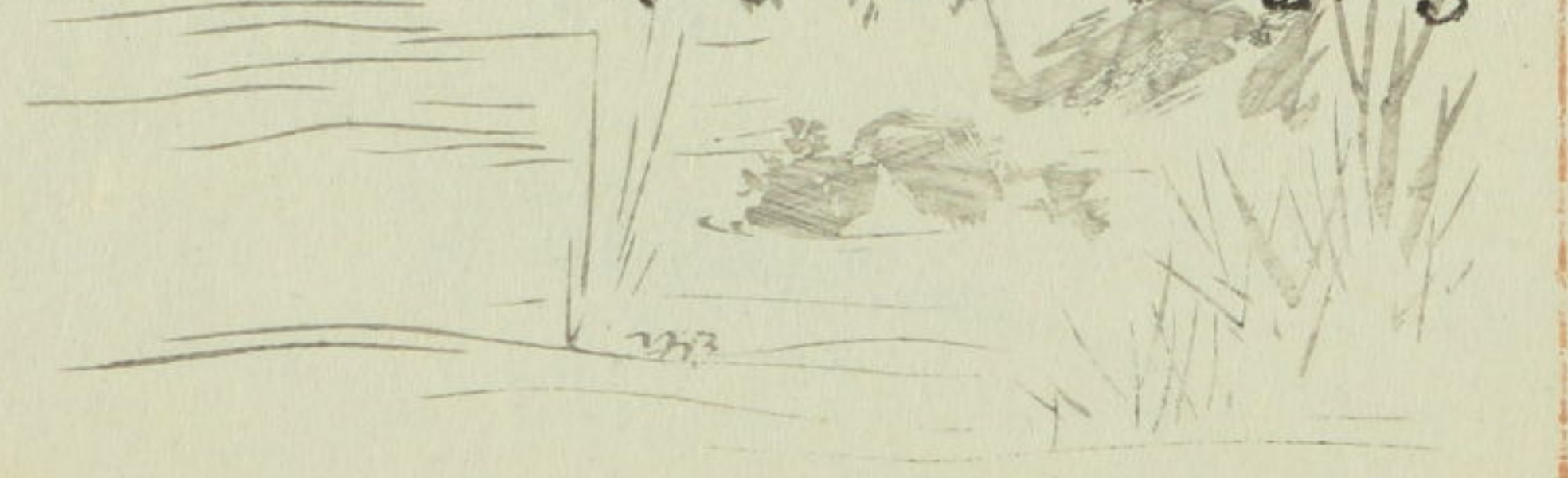
浪化



う張のひうりもくうま山の子キ
 十本はうりついでく付 鐘
 下魚を戸板のうへまおあきて
 お家とよ花の間の魚くくる
 えりけて寒い日かきそ夷講
 魁も床よ来る 鶯のよた
 ふりして場中へ白を轉し出
 容と川流をとらふ掃する
 秋もりも娘のうけとも新を帯
 ちあまらるもひもくぬこの掃



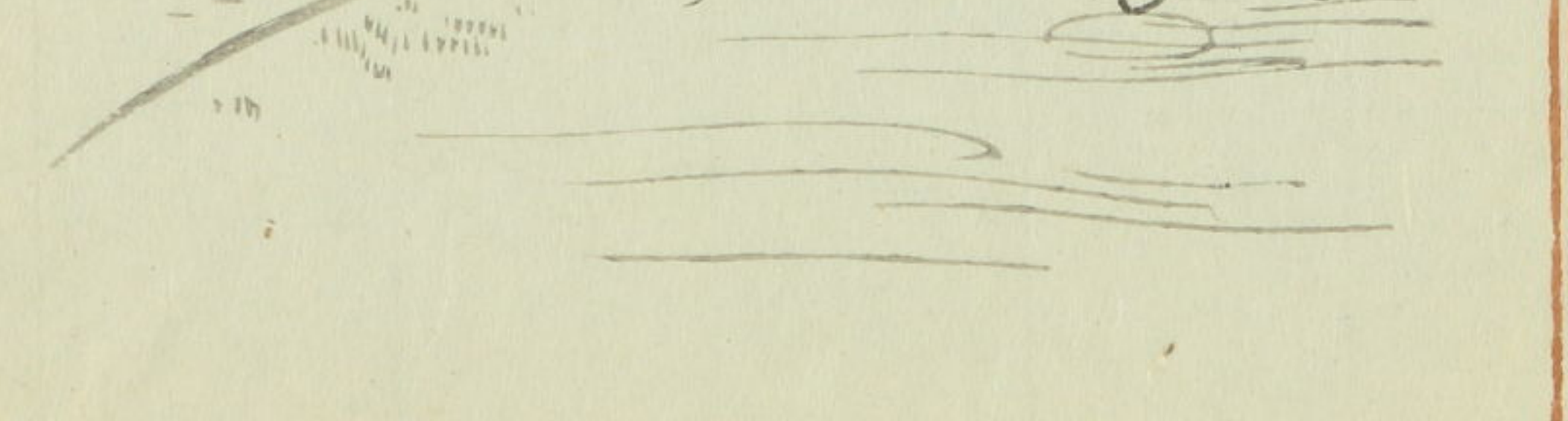
一番の海をままひー二番を
 あつるく成ー月の入除
 改めて荷物をらく船の右
 肩衣うけて向ふ内 佛
 子を膝も埋すちあうそ花の雪
 事のいり日孔最そつとよ成
 ちりしや羨も雄子の啼くを
 言みを流る近江海の川
 朝もも糞の櫃成負かす糸
 紺屋の衣とあつるへて越



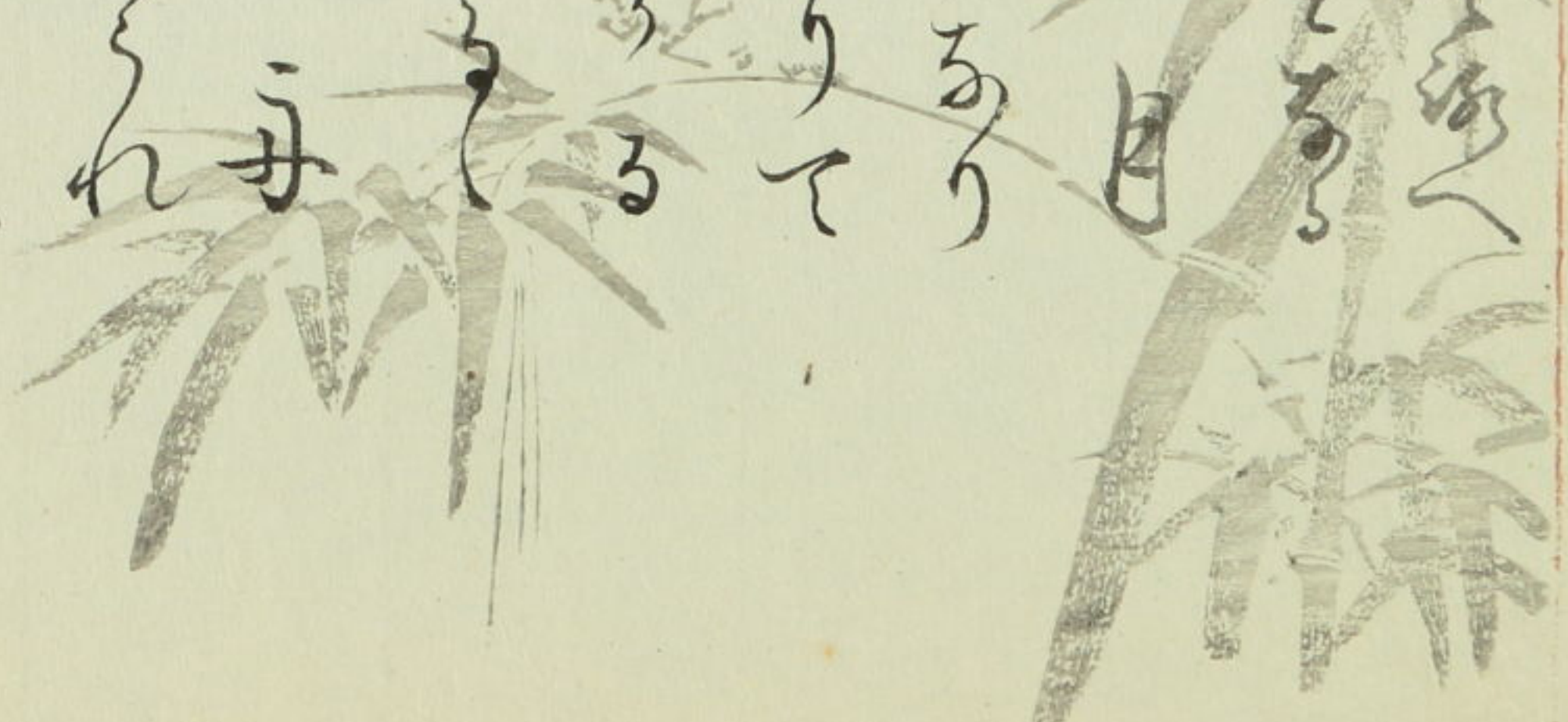
池のついでに雨の晴て行
せし鐘をうけて相住の寮
植やせし紫竹の中より花
浅草よりあつはあちさあの花
ちなうら洗ふる髪を洗へ
余所は住まえてあときり出
以中此病家のゆよくはあ
亦日はうらうらあ。月
うら風よ萩も花を採あきて
あさす枝り野々集り



門口に子い表を釣あり里あさひ
ちつとりのちよあさひ。洗
出替は道具たつむりうけらむ
山の原よりあしあの花
先は湯入の馬を引せけ
日和ありまむ大鳥の群
結構る宮の普清の成就を
燃し油を又借く行
竿はあしものすもも旅の膳
二日つまむる子あさひ飽



すのきりと仕立物も出来なれ
花の咲地も不こ
芹蓬つむくゆきハ鏡月
今もこれ丁の声うすうあり
炉をふさくそせ記吾等のひらうりて
美夏乃鑑を内儀あははる
くきふよ黒き雄猫を次ぎうりて
茶を大分よ下川 舟
そ〜とま時づりふるうれ
献立ちりて料理うけ取



う〜帝ハあうけ相乃小模様
濟家と見ゆる木像の尺迦
郭公毎年こ〜忠 覆みて
堺一杭まて〜あよと〜
赤砂利乃何もそぐ〜ぬ富上
秋よをりて狩つ〜早
出る月のちつと杉をそ離れ〜
念仏中〜船を身よ志む
絹平乃給御織を吹返〜
折目さるる鼻紙のうさ



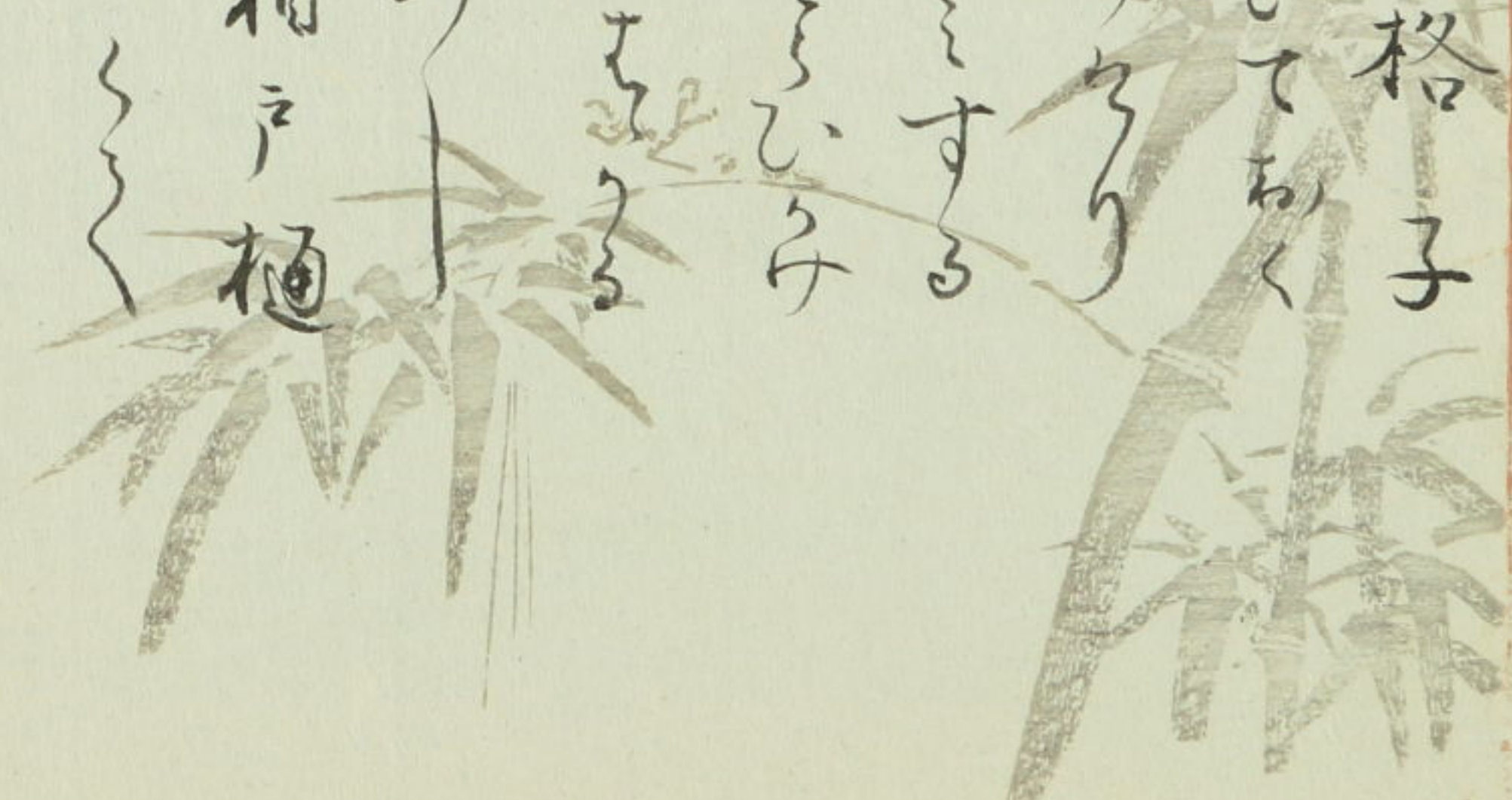
次は右の引女郎の利奈ありて
まふらゆる中玉なるあり
幟返てて窓柳あふくもまきよ
あふくてもうはなはな活一鯉
かきそ祢ハ減多よまきる白丁蒼
暖ぬけ役よ小御門の番
火を入くぬ上の切籠ぬるもあ
西瓜を賣つてあふく夕月
押さぬて城下まわらる秋の風
鷄成りけりなふも又さる




隣からふる来る人も庭の花
年をこころやせしむるす衣張
そりくと地虫乃うこくあふくまき
曲るとあふくを重寶なる杖
矢屏風の鏝ひつくと磨きく
雪の降出てもんとほるあり
汲くく桶よあふくまき海前船
尾崎めくまきまき三里るとあふ
用拙きや痛ふやまぬ胶菜
鉢れ中ふるあふく尾道



新月ふ角川廻り高格子
 五六俵ほや禪つむておく
 談合の末はお撲りぬみり
 秋通のそつをよつこする
 秘蔵ももすむすこをいひ
 屋板を葺目すよ世間を
 一ひ助ハ大名竹乃赤くみ
 清き流きをあくるひ相戸極
 くらをぬきぬぐりぬ眠くく
 下着をりて下とらきいさる



奥とをせ中院のすくよ又とぬき
 硯の蓋をあくるぬき
 卯とらよつ飛くわふ花の雲
 光りをとるふ山吹の色



右獨吟百句為師翁一廻追善三日
 之間吟了之早
 于時元禄八季十月十二日

芭蕉翁三廻懷舊

元禄九年十月十二日

誹諧之連歌

口切もきふし成くる茶湯うさ
 各く雪よ七つうふ侍
 ちうくと船の内うろ荷を揚て
 風の向ふくふる小屏し風
 来し人よ塩梅くのむ月の暮
 仕舞しきりめく賣柿
 秋雨ふりくるい物ちまうりやし

浪倉

林紅
 呂風
 路健
 嵐青
 夕兆
 虚舟

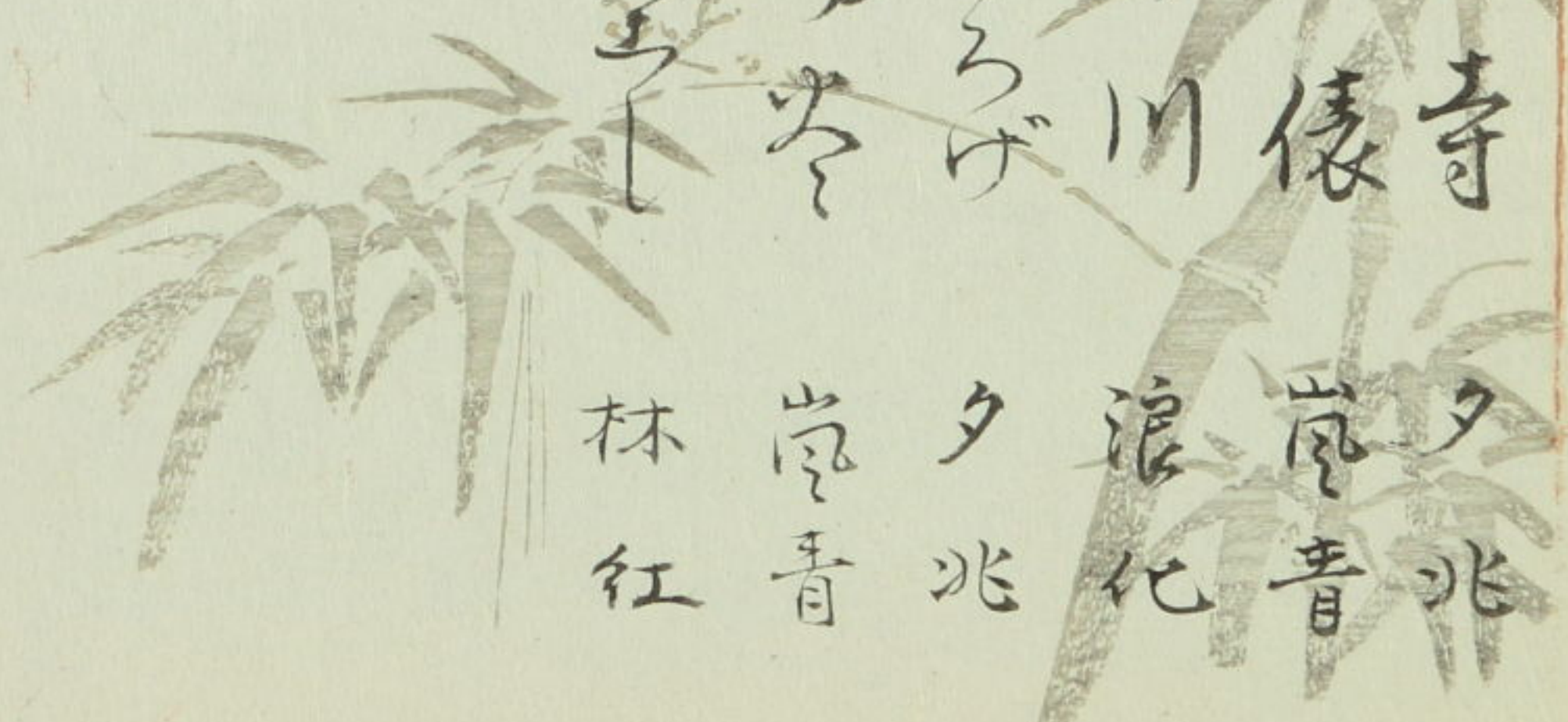
か馬を疾く遊む醫者

名作の刀切しに赤をおく
 四國乃便宜きのみきぬ
 初旅ハ馴るも初るも
 屋根の瓦を積りたる
 順とて百合の狂乃候
 どこへ行をも鎖さして
 二度目ハ古今れ傳受ゆる
 秋風の櫻欄此稍を吹さらし

筆

林紅
 浪倉
 夕兆
 呂風
 路健
 嵐青
 浪化
 林紅
 呂風

盆ハ女のやいさ云井寺
 白米を年中はそる小百俵
 中野此婦そり肥く野川
 咲花を屋鋪の外へ植ゑらげ
 日の定しそりゆる陽を
 初春よいそげと木具海
 夕兆 嵐音 浪化 夕兆 嵐音 林紅



キツに良サ客とワキ、あうま
 給銀ハ伯母と預けしつめさあり
 土と花のな根よ育つ雀子
 御能ふふぬけ及そりる春の月
 梶のからをサクとぬけおく
 ところからを依波の便を船ぞあり
 嵐音 浪化 夕兆 嵐音 浪化 夕兆



入多き室岩花の前ハワル奥 網 路健
 さくらもも 咲て何ハあやめ 岸青
 青流をれあさめさるるおつかひ 浪化
 御上領分ハ及も作ハ申 呂甲
 もらくさ 笛ハえこも 飛と逢 夕兆
 細ふよあさるる小刀の柄 岸青
 梨葡萄湯治のうちよそむらめ 路健
 木魁むくろ一床を這ふ声 岸青
 月の夜ハ鏡鏡の夕、う取くよて 呂甲

半むひあつよハあさるるぬき池 路健
 随分と名所のえよとあさるる令 岸青
 明日の勝負子こーらわら 浪化
 春のふゆ前へつもる慢がらり 夕兆
 女中どししの薬投 ちん 呂甲
 一腰をたつりささるるおとこ 岸青
 狐ッフトに尾をえせせとふ 浪化
 境目を竹の子とよハるるまて 夕兆
 元服させて是様よ 濟ム 路健
 上人の浄輿の先キよあーさやう 浪化

名

前々れうけし新茶正也
 阿つてよ京のまゝく一徳いそ
 子ズ呼しく小窓のあゝズ
 あくさくハ小鳥の心竜了下へく
 海のをささぐで柵けらる関
 モギドウに元々のゆるし山の坪
 念佛のうらむ長い石塔
 老犬の毛並もあゝ腰ぬけく
 横ましく戸は月の漁キル
 牀でよ強く呑いり玉子酒

歳暮の文よモノモ乞さし
 朝日さす方、雀のりざりつ
 元理の取勢よ弁を曳切
 門池を戸極で水とる長廊下
 奥からせくけまふ二段時合
 も合す柴盗人の泣き声
 木の病ハ枝のかゝやうら
 さいっ昼の日影をとめす堂の茶
 行歩もひとしの娘生ものうち
 下組のアツカヒすまます雨のち

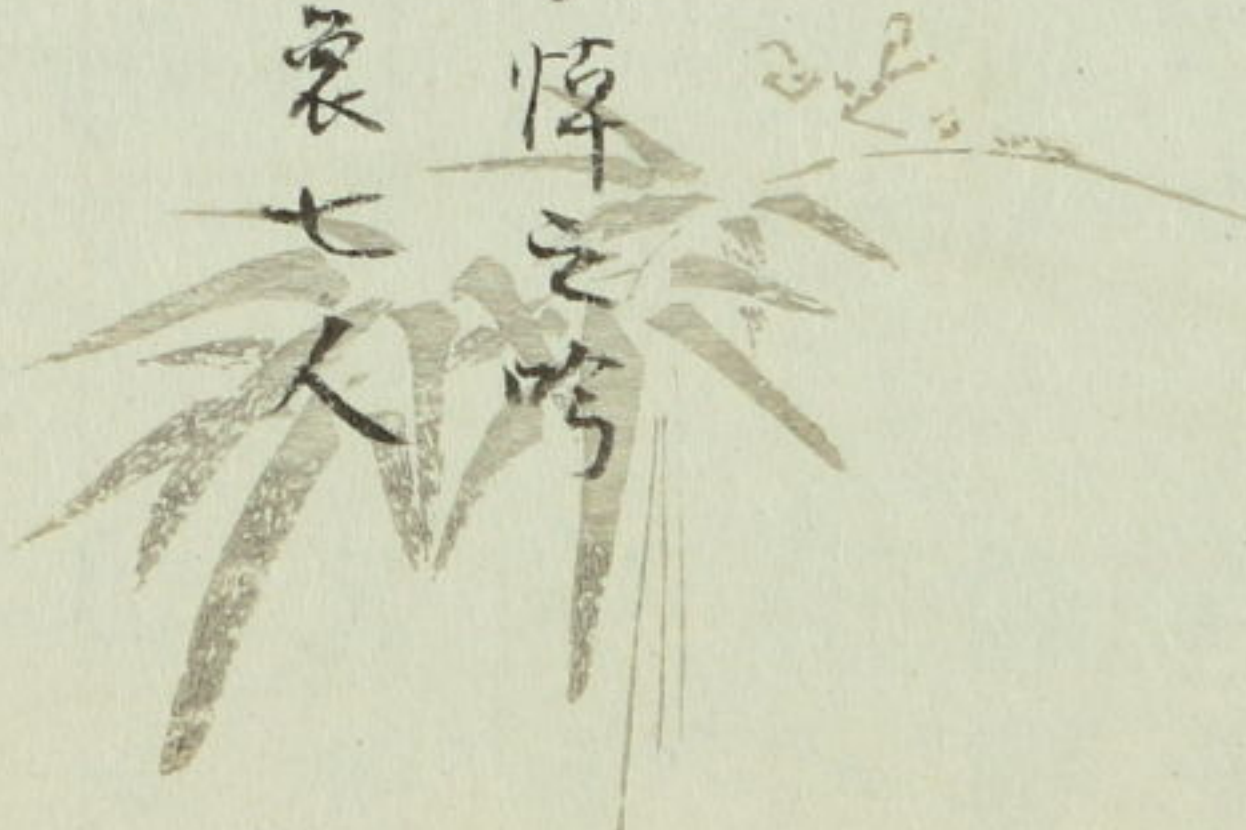
虚舟 岸青 浪化 夕兆 呂井 浪化 岸青 浪化 岸青

虚舟 浪化 夕兆 岸青 岸青 岸青 岸青 岸青 岸青

グノビの仕とる春のゆ即分 虚舟
一公即一連衆のこころりたよ候 浪化
休ととろ候の野草ととろ河 掃句

元禄九年十月十二日

右師翁三廻忌日為延福哀悼之吟
誄語百韻一日一座満早 連衆七人



哉中於玉井波ある浪化上人
自家のこころをうつりて集を
為しはるものごと大昔はるふり所
持たられしを借りてふけり字
しはるものあり

大正十一年一月

いせまろ初巻

一甫法





